

---

# 蝶を傍らに置く世界

紫苑 鎌鼬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蝶を傍らに置く世界

### 【Nコード】

N6863Y

### 【作者名】

紫苑 鎌鼬

### 【あらすじ】

とある世界では、人間が蝶を使って属性を隔て、蝶を使って暮らしていた。そんな世界に住む一人の少年ミナセは、緋色王国に仕える最強で最年少の蝶使い。そんな蝶使いがやるのは闇退治。とある闇と対峙したとき、一人の青い髪の少女リュウリンが中にいてそれを助けたミナセ。しかし実はリュウリンは緋色王国の第二王女で・・・！？

## 蝶使いと特別な緋の娘

風が、

ザアアアアアア

と木々の緑を揺らす森の中で

ピチチチイイイ

と鳥が鳴き去っていった。

それは、殺気を募らせる邪悪な存在が出現したことを示していた。

「来たな・・・」

ザツつと一歩踏み出し、水無瀬<sup>みなせ</sup>は前を見つめた。

肩には一匹の蝶、螺錠<sup>らじょう</sup>が水無瀬に寄り添い、ともに前を静かに見つめてた。

水無瀬の正面にはガサガサ、ズダンズダンと音を立てて、木をなぎ倒し歩み寄る大きな闇の気配。

茂み多き中で姿こそ捉えられないが、気配がその大きさがその闇を教えてくれている。

ガサガサガサ・・・！ザザツ

その闇は現れた。

だが、それは朝瀬がいつも対峙している闇<sup>もの</sup>ではなかった。

「・・・ニンゲン？」

水無瀬は思わず呟いてしまう。

姿かたちは今まで見た闇と同じで、

大きく動物の姿をしていてどす黒いだけなはずだったのに、

身体の中というのだろうか、中にいるモノが人間だった。

それも闇の触手のようなものに手足を四方に縛られて

その人間の魔力を闇が糧としているかのようにだった。

「はじめて見るな・・・。」

・・・中に人間が閉じ込められている。

普通、闇に食らわれてしまえば、身体も取り込まれるはずだが・・・。

そう水無瀬が透視しているうちに闇は動き出した。

「ウガアアアアアアアア」

奇妙な奇声を上げて朝瀬に襲い掛かってくる。

「螺旋錠」

水無瀬は静かに蝶の名を呼んだ。

それに応えるように蝶はひらりと音もなく舞う。

水無瀬は右腕を上げた。

そして・・・水無瀬の右手の甲に蝶は光を纏って絡みつき、



った。

「……」

……どうしたらいいだろうか

水無瀬はそう思いながら少女に近づき、膝を突いた。

そして、少女の背に腕を回してゆっくりと抱き起こし、少女の青い髪を掻き分けて首に触れた。

どくん……どくん……っ

「……生きている」

少し音は弱いがでも確かに鼓動はしつかりとあった。

だが、身体が冷たかった。それに魔力も無いに等しい。

水無瀬はひとまず彼女を抱き上げてその場を後にした。

『それ、どうするっ？』

唐突に螺錠が言葉を発した。

水無瀬の相棒でもあり、片割れでもある螺錠という蝶は、羽を開いたり閉じたりして、水無瀬の顔色を伺っている。

螺錠の言う“それ”とは少女のことなのだろう。

息をしている……つまり生きているなら、水無瀬のするべきことはただ一つ。

「とりあえず保護して、あるべき場所に返す」

水無瀬は淡々と答えた。  
それしか考えられないのだ。

「――彼女の着ている衣は王族だけが許される衣なのだから。

そして、空気の澄んだ泉のある場所までいくと、

影になる木の幹に背をもたれさせるように彼女を降ろした。

「螺錠、光を与えてやってくれ。

今、そいつに魔力はないから」

水無瀬は螺錠に頼んだ。

螺錠は光属性の蝶だ。

光だけを水無瀬が放つことはできない。

水無瀬自身が持つ属性は混合。

各属性を混ぜ合わせて使用することは可能でも、

どれか一つを、純粋な属性そのものを・・・使うことができない。

つまり、水無瀬の属性の長所は、すべての属性を従えることができるところ。

しかし短所は、純粋な一つの属性だけを操ることができないところなのだ。

『水無瀬がそう望むなら“それ”に与えてやろう』

「ああ、頼む」

水無瀬は頷いた。

魔力が身体に存在しないということは、命が刻一刻と削られていく

のだから。

光さえ与えれば、人間の身体は魔力を作り出すことができるのだ。

螺旋は動いた。

ひらりと舞い、彼女の額の前まで舞ってきて、そこで

ホオワアアアンッ

温かい光をふんわりと生み出し、彼女を包んだ。

光がすべて彼女に与えられると、水無瀬は彼女の首筋に触れた。

ードクン、ドクン、ドクン・

「・・・」

俺は少しほっとした。

先程よりも規則正しい鼓動だ。

徐々に回復し始めているのだろう、彼女の身体に温かみが戻ってきた。

水無瀬は彼女から離れ、竹筒を手につくと泉へと足をのばした。

螺旋は水無瀬の肩に乗って、行動を共にする。

泉の水に毒性が無いことを確認し、それを汲むと

静かに彼女の元へと向かった。

その少しの間に彼女は意識を取り戻していた。

遠くからでも、身体を動かしているのが見えて彼女に駆け寄ると



「・・・意識を取り戻したんだな」

そう水無瀬は彼女に声をかけて、正面に腰を降ろした。

「――」

コクンと彼女は小さく頷き、自分の手足を見つめ、動かしていた。

「・・・ここはどこ？」

彼女はそう疑問だけを口にした。

「ここは、緋色王国の国境、闇の森だ。」

「・・・闇のもり・・・」

俺の答えたその名前に彼女は確認するかのように呟いた。

「・・・この森は闇が出やすい。お前はその闇の中にいた。どうして闇に取り込まれたか覚えてるいるか？」

水無瀬は慎重に聞いた。

彼女は水色の瞳で水瀬を見つめて、しかし目をそらしてから

「・・・お城で、突然現れた・・・闇の獣が、・・・城で暴れて、・・・私を最初に飲み込んで

・・・そのとき、身体を束縛されるような感覚がして・・・魔力が奪われて・・・

闇の獣は大きくなって、他の人たちも食らっていったのが見えたのに・・・私以外は闇の中にいなくて・・・それで・・・」

思い出すかのように不安げな声色で話してくれたが、彼女の身体が震え始めた。

「わかった。もう話さなくていい。わかったから、な？」

水無瀬は膝を突き、彼女に優しく言い聞かせ、ふんわりと抱きしめた。

何故だか抱きしめたくなくなって思わずしてしまったのだ。

「・・・」

コクンと、彼女はゆっくりとうなずいた。

「あ、あの、・・・あなたの名は？」

彼女の震えが少し治まったあと、そう聞かれた。

「俺の名か？俺の名は・・・水無瀬。紫月むらさき 水無瀬。」

「ミナセ・・・？」

彼女は、はっとしたように俺の顔を見上げた。

「そつだ。なんだ、知ってるのか？」

水無瀬は思わず彼女を見つめてそう聞き返す。

彼女の鸚鵡返しには何故か、そういう見知った風な感じだったから。

「・・・聞いたことがある名前だと、思ったから」

「そうか、まあいろいろと・・・有名だから俺は」

俺はそう言葉を濁しながら、目をそらす。  
だが、不意に、彼女の名前が気になって、

「お前の名は？」

「・・・スズキ 瑠燐。 緋色・翠・瑠燐」

彼女は淡々と名を言った。

「リュウリン・・・？」

・・・どこかの王族の娘だと思ったら、  
まさか、俺の仕える、緋色王国の次女だったとは・・・

「・・・うん」

俺は驚いた。

まさか、あの、赤髪を持つ王国の娘だなんて思いもしなかった。  
彼女の髪は青色だし、瞳も水色だ。赤とはまるっきり正反対の色なのだから。

だが、さほど驚くべきことでもなかった。

色はさておき、彼女が緋色王国の王女だということは、証明された。  
俺が王城にいない間に起きた、王城闇騒動で行方不明とされた少女と一致しているのだから。

命の気配を察知できる誰かが王城にいるのだろう。

それなら、行方が知れずとも生きていることだけは分かる。

「緋色王国の次女の髪も赤だと聞いていたが、  
実際は青なんだな。．．まったく王も酷なことをするんだな」

「．．．」

俺は抱きしめる腕に力を込めた。

「リン、俺は色で差別なんかしないから安心しろ」

リンとそう呼びながら彼女の髪を撫でた。

水無瀬自身も色で差別され続けた人間だ。

今は黒髪だが．．本当は．．．。

「ミナセ、．．あのね、水に濡れると青から緋あかになるの．．」

「そうか。それで、赤にされたんだな。色が変わる条件というものは酷だな．．。」

リンが水に濡れば色が変わると訂正しても尚、水無瀬の意見は変わらなかった。

「．．．」

「．．．」

リンはそれつきり黙って水無瀬に身体を預けた。

水無瀬はこれからのことを考えた。

リンは生きていると、俺が保護したと報告しなければならぬな。

そう、鳩で連絡し王城に向かわなければならぬと水無瀬は思った。

「リン、今は深く考えず、ゆっくり休め。明日はこの森から出る。」

「・・・うん」

2人はそう話して、リンは、眠りについた。

## 蝶使いと特別な緋の娘（後書き）

感想、評価、誤字脱字に関しての報告待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6863y/>

---

蝶を傍らに置く世界

2011年11月20日20時04分発行